阪神淡路大震災から10年 あの体験がアークの転機にも ジェフ ブライアント

またしても、自然は恐ろしい破壊力を証明し ました。東南アジア数ヶ国を襲った今回の大 地震と津波は、ある新聞の表現を借りると「現 代の最も悲劇的な事件のひとつ」であり、死 者数25万人を超え、インド洋沿岸一帯に壊 滅被害をもたらすものでした。メディアでは あまり報道されないものの、津波は動物界 にも影響を及ぼしたため、幾つかの愛護団 体が現地入りして救援活動を続けています。 WSPA (世界動物保護協会) と HIS (国際 ヒューメーン・ソサエティ)はチームを派遣 して、地元の救出にあたっています。この地 域の犬はつながれていないので、差し迫った 災害を本能的に察知して、難を逃れたと思わ れます。狂犬病はこの地域の深刻な脅威であ り、被災地の動物にワクチン接種と不妊手術 を施すことが最優先課題となっています。救 援と復興の取組みを長期的に続ける必要があ るのは言うまでもありません。

うれしいことに、金銭、物資、両方の援助が 次々と寄せられています。各政府と援助団体 の速やかな対応は、それ自体、ニュースになっ ています。そのひとつとして、ワシントンポ スト紙の1月1日の記事が特に私の目を引き ました。南インドのタルミナドゥ州の被災者 の話として――「近隣都市が組織する救援活 動の方が政府の援助よりも速く、目立ってい た」というもの。これを読んだ途端に、私は 10年前に引き戻され、わが町神戸を襲った あの災害をまざまざと思い出したのです。

1995年1月の阪神淡路大震災の折、最初 に被災者に届いた援助物資は、行政当局から

ではなく、一般市民から寄せられたものでし た。そして、救援物資の収集と配布に直接的 に関わりたいとの願いが、日本語に「ボラン ティア」という新しい言葉を付け加えました。 現在の NPO 法(特定非営利活動促進法)と それを機に生まれた団体の多くは、実際には、 この災害に端を発しているのです。アークの 今の規模と活動範囲も、もとをたどれば、あ の地震と密接な関係があったと言えます。

地震の前までは、アークの構成員は、動物 90匹、オリバーさん、それに、数名のボラ ンティアだけでした。ところが、地震後、アー クは行き場を失ったペット600匹以上を引 き受けることになったのです――ひと晩だけ の場合もあれば、数年間預かった動物もあり ます。今でも、あの地震の"被災者"が何匹 かいます。アークは、動物を探し歩き、救出 して餌を与えるために、いち早く、最も被害 が甚大だった地域に入ったグループの一つで した。しかし、多数の動物がアークに殺到し たのは、オリバー代表がテレビで明言してか

「飼い犬/猫に安楽死を考えている方、皆様の ペットを私たちがお預かりしましょう」と。 大切なペットでも、動物が飼い主と一緒に"人 間"の避難所に入ることは許されなかったの です。想像してごらんなさい――住む家も、 大方の財産も失ってしまい、その上、愛する 犬猫の命も断たなければならないとしたら…

アークは、急に動物の数が増えた場合に備え ていなかったものの、この恐るべき事態に直 面しては、できる限りのことをするしかない、

と方針を決めました一すなわち、困っている 動物すべてを受け入れる、しかも、無料で ……というもの。幸い、世界中の多くの動物 愛好者がアークを支援し、寄付金を送ったり、 自らボランティアとして来てくれたのです。 また、アークは、このことで、一躍知名度が 上がり、全国的に知られるようになりました。 動物の窮状がメディアに取り上げられるにつ れ、日本各地から30億円近い義援金が寄せ られました。そのうちの幾らかは、被災動物 のため三田市に造られた仮設シェルターの運 営に使われましたが、そこは1年もたたない うちに閉鎖されてしまったのです。寄付金の 残りは「次の緊急時のために」保管しておく ということでした。アークは1円たりと受け 取っていません。メディアが最近伝えたとこ ろでは、三宅島から避難したペットを救うた めに使われたとか。しかし、あの資金の使途 について、詳しい説明は未だに公表されてい ないのです。

2005年1月現在、アークにはおよそ500 匹の動物が収容され、スタッフ30名と、ほ ぼ同数の定期ボランティアがいます。助けを 求める声は日本中から寄せられるものの、そ の財源は、すべて有志の寄付に頼るほかあり ません。もし、10年前、あの地震が起きな かったら、今ごろアークはどうなっていただ ろう…と私はよく考えます。今回の津波は、 被害を受けた地域一帯に大きな変化をもたら すと思われます。同様にアークの将来も、運 命の日、1995年1月17日と深く関わっ ており、あの体験を抜きにしては考えられな いのです。

10 years on - Kobe Remembered

Jeff Bryant

nce again, nature has demonstrated her awesome and destructive power. In What one newspaper has called, 'one of the most tragic events of our times' the earthquake and tsunami that devastated the coasts of several southeast Asian countries has killed over 250,000 people and wiped out entire communities. Although not getting much coverage in the media, the animal kingdom was also effected by the tsunami and several humane organizations have been working at the scene on behalf of the animals. The World Society for the Protection of Animals (WSPA) and Humane Society International (HSI) have sent in teams to help local rescue groups mostly with bands of homeless dogs now scavenging for food and water. Since dogs in those areas are seldom chained, they could easily, as instinct warned them of the impending disaster, escape to safety. Rabies is a serious threat in these regions and the vaccination and neutering of these animals is high on the list of priorities. Needless to say, the relief and reconstruction efforts will be ongoing for quite some time.

On the positive side, the outpouring of assistance both financial and physical has truly been heartening. The swift response of both governments and aid organizations was in itself a news story. One such story, in the January 1st edition of the Washington Post, especially caught my attention. Survivors in the southern Indian state of Tamil Nadu said the relief efforts organized by neighboring cities arrived more quickly and had been more visible than government help. As I read this, I was instantly transported back ten years and flooded with memories of the disaster that struck my city, Kobe.

It was in January of 1995 that the first supplies to reach the victims of the Great Hanshin/Awaji Earthquake came not from the authorities, but from concerned citizens. This desire to be involved directly in the collection and distribution of supplies added a new word to the Japanese vernacular, volunteer. The present NPO law and many of the organizations it gave birth to are the direct result of this event. It can also be said that present size and scope of ARK and it's activities are also directly related to the quake.

Before the guake, ARK consisted of about 90 animals, Oliver-san, and several volunteers. In the following year ARK took in over 600 animals who had been displaced, some for only a night while others remained for several years. There are still earthquake animals at ARK. ARK was one of the first groups to make visits into the most devastated areas for the sole purpose of rescuing, feeding and looking after animals. But the biggest influx came after Oliver-san's pledge on TV to take in any pet whose owner was considering euthanasia. Beloved pets were not allowed to accompany their family into 'human' shelters.Imagine losing your home and most of your possessions and then being forced to put down your dog or cat.

ARK was not prepared for a sudden increase in numbers, but faced with this horrible situation it made the only decision it could; to take in any animals in need, for free. Fortunately, animal lovers from around the country stood with ARK by sending donations or coming in person to volunteer! With all this publicity, ARK